

策士オメガの完璧な政略結婚



セオドア *Theodore*

ノアの従者。主にも膽さずものを言えるマイペースな青年。

ライオネル *Lionel*

血筋よし性格よしの α の辺境伯。
ノアに振り回されながらもどこまでも真摯に優しく接している。

ヴィクトール *Victor*

α の第二王子。人気はあるが傲慢で、ノアを側室として狙っている。

エルドリック *Eldrick*

ライオネルの副官。上司を敬愛しておりノアとの関係も心配しつつ見守っている。

ノア *Noa*

天使のような外見に扱くれた内面を持つΩの子爵令息。没落寸前の実家のためライオネルとの結婚を決める。

C H A R A C T E R S

序章

「ノア・フォーフィールド。お前は今日も最高に美しい」

俺は自室にある大きな鏡の前で、自分自身に話しかける。

金色の絢爛な刺繡の入った赤色の上着も派手でいい。婚礼衣装の出来栄えは問題ない。職人に何度もやり直しをさせた甲斐があつた。

次に俺は自分の顔をあちこち眺めた。肩に触れるくらいの長さのプラチナブロンドの髪をかき上げ、エメラルドグリーン色の瞳を瞬かせてみる。

「完璧だな」

鏡に映る俺は口角を上げ、自信に満ちた顔をしている。

思つたとおり、これ以上ないくらいに完璧だ。

手入れの行き届いた柔らかい白肌に、造形美の極致のような顔のパーツ。多少の好みはあれど、これを醜いと言う奴はないだろう。

よし。これならどんなアルファだって虜にできる。

俺の唯一と言つてもいい武器は、この類まれなる美しい容姿だ。

俺の第二の性は、男でも子を産めるオメガだ。貴族はアルファの割合が平民よりも多いから、俺みたいな子爵令息のオメガは希少だ。

アルファはアルファやベータなどオメガ以外のバース性と結婚することもできるが、アルファとして生まれてきたからにはオメガと番ばんいたいと思うものらしい。そのため俺のもとにはアルファからの求婚が途絶えない、というわけだ。

ま、もちろん容姿がいいのも人気の理由だ。

貴族の結婚はお互い好き合つてするものじゃない。側室だつて何人も抱えることができるし、政治的なものや見た目だけで決めることが多く、みんな俺の容姿に惹かれてすぐに求婚してくる。無論、誰も俺の中身なんて見ちゃいない。知つていたら俺に求婚なんてしないよ。

俺の性格は最悪だからな。俺は人に合わせたりお世辞を言つたりするのは苦手だし、英雄みたいに誰かを助けたいとも思わない。

貴族学校時代も、俺に「アルファの彼氏を取つた」とか喚わめき散らしてくるオメガがいたから「お前が下品でうるさいから振られただけだろ」ってはつきり言つてやつたら、そいつが泣き出して俺がいじめたみたいになつたし。

記述の試験で俺とアルファのアホ令息の答案がまるきり一緒になり、俺は断じて盗み見たりしていなかつたのに、なぜか俺がアホ令息の解答を写したことにされたし。

その理由は、オメガがアルファより賢いわけがないからだそうだ。マジでふざけてる。アホ令息は俺の後ろの席だつたんだから、答案を写したのはどちらかなんて明白なのに。

で、俺はそういう理不尽にいちいち文句をつけるから嫌われる。でもさ、俺が俺を庇つて何が悪いんだよ。オメガなら黙つて耐えろ？ 友達ならアホ令息の名誉を守つてやれ？ なんだよそれ。俺は自分自身を守るので手一杯だ。人のことなんか構つちやいられない。

みんな偽善者ぶつてないで正直になれよ、と言つてやりたい。

人間誰だつて自分が一番可愛いに決まつてる。己の利益を追求しているだけなのに、どうして「悪役令息つてノアみたいな奴のことを指すんだろうな」と陰口を叩かれるのか、俺はいまいち理解できな。

「ノアさま。お支度は整いましたでしようか？」

コンコンと俺の部屋の扉を叩く音が聞こえ、扉の向こう側から使用人のセオドアが出発の刻ときを告げてきた。

セオドアは俺と同い年の十九歳で、祖父とともに我がフォーフィールド家に仕えている。髪の色は明るい橙だいだい色。西の国ラクナからの移民で瞳の色に特徴があり、珍しい黄色い瞳をしている。そして話す言語も違う。セオドアはそこそこ共通語を話せるが、セオドアの祖父は共通語が苦手だ。そんな行く当てのない異色の祖父と孫をこの家の使用人として雇つたのは他でもない、お人好しの俺の父親だ。

「行つてくるよ、キール」

鏡で姿を確認したあと、鏡台の引き出しを開けて、中から古びた赤い革製の首輪を取り出す。首輪は剣で斬られていて、今は輪つかの形はしていない。

この赤い首輪を軽く胸に抱きしめ、出発の挨拶をして出かけるのがいつもの俺の日課だ。

でも今日は、ふと手が止まる。

俺はしばらくの間、この部屋に帰つてくることはないだろう。

婚礼に備えて俺は一切の無駄を省いた完璧な荷造りをした。このキールの首輪はどう考えても不要なものだ。それなのに、どうしても首輪を手放すことができない。

「俺と一緒に行つてくれるか？」

なぜかわからないが、最近ほとんど思い出すことがなくなつていてキールの顔を鮮明に思い出した。それが、キールの訴えのような気がした。

俺は赤い首輪を懐にしまい、部屋を出る。

この部屋を出たら少しの油断も許されない。一拳手一投足に気を配つて、完璧に振る舞わなければならない。

隙なんて見せるものか。俺はもう二度と誰にも心を許さない。信じられるのは自分自身だけだ。

「うわあ、なんて美しい！ 馬子にも衣装！ さすがは絶世のオメガと言われたノアさまの婚礼衣装ですっ」

廊下で待機していたセオドアが、俺の姿にすっかり見惚れている。

だがその褒め方が引っかかった。

「あのな、馬子にも衣装という言葉は、中身はどうあれ、立派な衣装を着ればそこそこ見栄えがするつて意味だ。早く言葉を覚えろ、それは褒め言葉じゃない！」

「そうだったんですね、失礼いたしましたっ」

セオドアはウチで働くようになる前までは、共通語をまつたく話せなかつた。そこそこ話せるようになつた今でも変な言葉遣いをする。しようがないから俺もセオドアたちの言語、ラクナ語を覚えたけど、こいつにはわざわざ使ってやるものか。お前のほうが共通語を覚える。

「それと。美しいのは衣装だけか。俺を褒めろ、俺自身を」

「た、大変申し訳ございませんっ。もちろん美しいのはノアさまです。ノアさまがお召しになつていらつしやるからこそ、衣装も輝いているのでしよう」

「もういい。早く馬車を出せ。時間の無駄だ」

セオドアも俺にいつまでも怒られるのは嫌だろう。今日はこのくらいで勘弁してやる。

「はい！ 準備は整えてございます！ どうぞこちらへ」

廊下を歩きながらも、セオドアは「いつもノアさまは完璧でございますね」としつこく褒めてくる。「当たり前のことです」

セオドアが俺にすり寄つてくる理由は単純だ。俺の機嫌を損ねてケビになりたくない、気に入られれて褒美が欲しい、そんなところだろう。

だからそれは無駄だと教えてやる。お世辞を言われても俺は喜んだりしない。

「はは。そうですね。ノアさまは美しいに決まつてますものね。ついにノアさまもご結婚ですか。貴族学校時代からモテモテでしたから、いつたい誰をお選びになるのかなと思つてましたが、まさかあの御方をお選びになられるとは意外でした」

セオドアは従者のくせに俺に馴れ馴れしいところがある。俺のことを友達とでも勘違いしているのだろうか。俺は腐つても子爵令息だ。身分違いも甚だしい。

「まあな。意外だらうな」

まあ、意外は意外だらう。俺があいつを結婚相手に選んだのは愛でも恋でもない、政略的な理由だからな。

「はい、意外です。ノアさまはイケメン好きだと思いましたから」

イケメン好き……セオドア。もうちょっとと言葉を勉強しろ。他に言い方があるだろ、言い方が。

「俺は別に人を容姿で判断したりしない」

「えつ？ 自分は鏡ばかり見てるのに？」

こいつ、俺にケンカ売つてんのか。なにを「素朴な疑問です」みたいな顔して目をぱちくりさせてるんだよ。

「そうだ、人は見た目じゃない」

俺は本当にそう思つてゐる。でも自分はこの容姿に頼るしかない。俺、中身は嫌な奴だもん。

「ノアさま」

玄関前に控えていた腰の曲がつた白髪の使用人が、俺に丁寧に頭を下げてきた。セオドアの祖父だ。

「(出迎えご苦労)」

俺はセオドアの祖父に対してもラクナ語を使う。どうしても共通語が覚えられないみたいだからな。まあ、こんな老いぼれジジイには無理だろうと思つて、俺が合わせてやつてている。

「(はい。当然でございます。今日でしばらく会えないと思うと、どうしても胸に込み上げてくるものがございます。私はノアさまをずっと見守つておりましたので、親心のようなものが芽生えてしまい、本当に今日のノアさまのお姿がまぶしくて……)」

セオドアの祖父は涙ぐんでいるが、そんなものに俺はなびいたりしない。

「(間違つても俺はお前の子どもじゃない。お前の子孫はセオドアだろ)」

何が親心だ。よく言つたものだ。なんの力もない平民ほど、愛情だの友情だの、そういうた不確かなるものを大切にしようとする。そんなものに頼ることなんて俺にはできない。

こんな老いぼれになつても、お人好しの父上は「偏屈なノアの数少ない理解者だ」と言つて、こいつをいつまでもクビにしない。

「(はい。存じております。ライオネル・バーノン辺境伯さまのともに嫁いでも、どうか、どうか幸せにお過ごしください)」

「はいはい、そうだな」

俺はその言葉をさらりと聞き流す。

俺とライオネルとの結婚は政略結婚だ。政略結婚なのに幸せになるはずがないだろう。何も知らぬ呑気なジジイは黙つてろ。

「(オメガの幸せは昔から素敵な番を見つけることと言われております。ノアさまは苦労の多い人生を過ごされていらっしゃったので、素敵な伴侶を見つけられたらいいなど、古い先の短い私の戯ざれ言でございました)」

「本当に戯れ言だな」

俺はこれみよがしに溜め息をつく。

「（アルファに頼つて生きるなんて俺は絶対に嫌だ。今に出世してみせるから、それまで長生きして、この家でのんびり待つていろよ）」

アルファなんて信じない。運命の番なんてクソくらえだ。

俺にはアルファは要らない。アルファと番うどころか、この身体に指一本触れさせるものか。ライオネルと辺境の地で暮らして一生を終えるなんてありえない。

「（さようでございますね。そのために、長生きしなければなりませんね）」

セオドアの祖父は俺に微笑みかけてくる。まつたく俺に好かれようとしてどうする。媚びを売るなら父上にしろ。本当にどうしようもないジジイだ。

「（ノアさま。老いぼれの私はついていくことができません。ですから今後はセオドアに身の回りの世話をさせてください）」

「はつ……？」

セオドアに、身の回りの世話……？

「お前、俺についてくるのかつ？」

よく見れば扉の横にセオドアの荷物が置いてある。セオドアはそれを背負い、にこにこと笑顔で近づいてきた。

「はい。精一杯、務めさせていただきますつ！」

セオドアは張り切つている様子だ。が、俺は呆れて言葉も出ない。

ダメだろ。俺なんかに構つてる余裕はないはずだ。この家は圧倒的に人手が足りないと。この家は子爵の家から嫁ぐのに、まさか従者のひとりも連れて行かないのでは格好がつかないだろう」

にこやかな顔をして、会話に加わってきたのは父上だ。

「ですが、父上……」

家の財政難をご存じですか、と指摘したい。

俺はどんな嫌味を言われようともひとりで耐えられる。嫁入りのための品は一切要らないと伝えていたのに。

「ノア。少ないがこれを持つていいってくれ。このくらいしか用意できなくてすまないね」

父上が手渡してきたのは金の入った袋だ。世間的に見たら少ない金額だが、俺にはわかる。家中からかき集めるようにして用意したものに違いない。

こんなものを俺に持たせたら生活がさらに苦しくなるじゃないか。

父上は見た目も温厚そうに見えるが、中身はもつと人がいい。

金もないくせに、自分の領地が餓饉に見舞われると税を納めなくとも農民たちを許してしまう。

出世欲もないから、貴族たちが集まる中央会議に出席しても何も主張せず、唯一の爵位である子爵の位も隣の領土を治めているユーデリア侯爵家に狙われて、奪われる寸前だ。

ここまでお人好しが過ぎると、呆れてものも言えない。このままではフォーフィールド家は没落してしまう。

こうなつたら長男である俺がなんとかするしかないと、ライオネルとの政略結婚を思いついたのだ。

「要りません。こんなはした金、何になると言うんですか」

俺は金の入った袋を突き返す。

「俺は何も要りません。この身ひとつで十分です」

そう言って父上に完璧な微笑みを向けた。

この俺の手にかかるべく、金くらいなんどでもなる。俺のことなんて気にしてないで、弟たちにもつといいもの食わせてやれよ。

「兄上ーっ！」

ドタバタと走ってきて、俺に抱きついてきたのは弟たちだった。次男ハリソン十二歳、三男ソリア八歳、四男マール五歳。揃いも揃って全員ベータ顔。まつたく頼りにならない、俺の可愛い弟たちだ。

「兄上素敵、かつこいい！」

「いってらっさいましぇ、あにうえ」

俺を褒めてきたのは何をやらせても出来の悪いソリア。それに続いて、五歳になるのにいまだに舌足らずのマール。

「兄上、ご結婚おめでとうございます」

律儀に挨拶してきたハリソンは、本当なら貴族学校に通っている年齢なのに、授業料が払えずには

どうとう自宅待機になつてしまつた。

全員まとめて俺がなんとかしてやらなきや。

「行つてくるよ」

俺は順番に弟たちの頭を撫でてやる。するとみんな無邪気な笑顔を俺に向けてきた。三人の瞳は純粹で、キラキラと輝いている。

弟たちにはまつすぐ育つてほしい。俺みたいに最低最悪な人間にはなつてほしくないな。

「さあ、辺境伯のもとへ出発しましよう、父上」

弟たちの見送りを受けながら俺は颯爽^{さうそう}と屋敷の外へ出る。天気は快晴、今日に相応しい天気じゃないか。

丈夫。すべては俺の思いどおりになる。

悪魔のような俺の正体に気づかずに求婚の手紙を寄越してくるとは、ライオネル・バーノン辺境伯は不幸な男だ。辺境において中央にいなかつたせいで俺の悪評を知らないのだろう。

ライオネルは、これから俺にすべてを奪われる運命だ。

世の中、正直者はバカを見るんだよ。この世を生き抜くためには、このくらいやつて当然だ。

俺はこの政略結婚を完璧に成し遂げてやる。この美貌と頭脳を使って、華麗にのし上がつてみせる。

俺は父上の隣で辺境伯の城へ向かう馬車に揺られながら、ぼんやりと宙を見ていた。王都に近いフォーフィールド領は、中央の城に向かう街道が領地を貫いており宿場町として栄えている。石造りの建物が立ち並び、かなり発展した雰囲気だ。王都の流行りものだつてすぐに領地に情報が流れてくる。

対する辺境の地グルグガンドは、はつきり言つてど田舎だ。領地は広大だが、山々に囲まれ荒野が広がる大自然。空気は澄んでるし、畠仕事にはもつてこいなのかもしれないけれど、俺から見たらダメだ。

当然馬車ではそんな遠くに一日で辿り着くのは不可能で、途中宿での休息を挟みつつグルグガンドへ向かっている。

なんでそんな田舎に引く手数多の都会派である俺が嫁ぐことを決めたのか。そこには重大な理由がある。

遠い昔、今の国を興した中心人物は三人。勇者と騎士と司教だ。

勇者の血を受け継いだ子孫たちが、現王家の者たち。だがそれでは王族の権力が強大になりすぎると考えた三人は、ある法律を作った。

国の要職に就く者を決定する際に、国王ひとりだけでは決められないようにしたのだ。

どちらかひとりでもいいから、騎士か司教の血筋を引き、後継ぎとなつた者の推薦を得なければならぬ、という法律が制定された。

しかし長い歴史の間で力の均等性に歪みが生まれた。ふざけたことに、騎士の子孫は王家とべつたり内通しているのだ。

そのため、国の実権を握っているのはそいつらで、フォーフィールド領の隣の領土を治めているユーデリア侯爵家は、そこへすり寄つて自分たちの利益を図らつてもらおうとしている。反対にコネのない貴族は爵位を奪われ、追いやられている状況だ。

初代三人のひとり、司教の子孫は、十年前から辺境伯として要所で戦い、国を守つている。そう言えば聞こえはいいが、要は治世に口出ししないように辺境の地に追いやられたんだろう。

そう。司教の子孫こそ、ライオネル・バーン辺境伯だ。

俺はライオネルと結婚して、強大な地位と名誉を手に入れる算段だ。

国法では、一年以上婚姻関係にあれば、親族と認められ爵位の繼承が許されるとある。

ライオネルには兄弟はない。近しい血縁の者もほほいない。天涯孤独同然の状況だ。

司教の家系から受け継がれている公爵の爵位を、なんとかして俺に継承させる。

爵位は男系親族しか継ぐことができない。俺は男オメガだから、嫁という立場でありながら爵位を受け継ぐことができる。

こんない方法を利用しない手はないだろう。普通、爵位は父親から息子へ受け継いでいくもの

だが、男オメガの俺は法の隙間をかいくぐつて爵位を受け継げる。

だから俺は、標的をライオネルに定めて政略結婚をすることにした。こいつは最も使える爵位を持つている男だ。

俺の策はこうだ。

まず、この一年間でライオネルに気に入られるように振る舞う。そして、俺の魅力にメロメロになつたところで、ライオネルに司教の家系だけが持つ力を譲つてほしいと懇願する。その理由は俺が中央でいじめられているとでもなんとも言つて同情を買うのがいいな。

爵位をくくなきや離婚するつて脅してもいい。爵位をくれたら一度くらい抱かせてやつてもいい。とにかくこの美貌を使ってライオネルを俺に惚れさせて、公爵の爵位を俺に譲るよう仕向けるのだ。ライオネルは聞く話によると、怪物のように強くて、恐ろしい姿をしているらしい。そのせいで貴族アルファのくせに二十九歳になつても嫁が見つからないそうだ。そんなオメガ慣れしていない純真な男なら、手玉にとるのも容易に決まっている。

そして一年後、爵位を奪つた俺は離婚する。理由は死別が最も世間体がいいが、そこまでライオネルから奪うのはやりすぎか。

でもあいつのことは可哀想だなんて思わない。どうせ他にも爵位はいっぱい持つてるんだろうから、ひとつくらいもらつてもいいはず。まあ、俺が騙し取ろうとしている公爵の爵位は、最も重要な爵位だろうがな。

馬車は田舎道から石畳の舗装路に入り、ついに辺境伯の城が見えてきた。

隣国に近く、国境間近の山々に囲まれた辺境の地にあるのに、なかなかに立派な城だった。左右にひとつずつ、そして中央にある塔の造形がしつかりしていて見栄えがよく、城壁の長さから察するにかなり敷地が広そうだ。

「結構な金もありそうだな」

実は俺は爵位だけじゃなく、できるだけ財産も奪つてやろうと画策している。
お人好しな父上のせいだ、フォーフィールド家はかなりの財政難だ。

やはり持つべきものは金だ、金。世の中のほとんどことは金で解決できる。

「バーノン辺境伯は、この辺り一帯を治めていらっしゃるからな。相当なお金持ちだろう。家柄も申し分ない。ノアは本当にすごい御方に嫁ぐことになつたな」

俺の策略などなんにも知らない父上は呑氣なことを言う。

嫁ぐけど、すぐにライオネルとは華麗にさようならだよ。一年後、俺はあいつから爵位と財産を奪つたあと離婚してやるんだ。

馬車が城門をくぐり、正門の前へ到着する。そこには大勢の人々が出迎えに来ていた。別に俺を歓迎しているわけじゃないだろう。二十九歳、売れ残りの怪物ライオネルにいつたいどんな嫁が来るのか、気になつて仕方がないんだろうな。

俺は馬車から降りる。途端、周囲から歓声が上がつた。そして「綺麗」とか「美人」とか俺の容姿を褒める言葉ばかり聞こえてくる。

まあ、当然だな。俺から容姿を取つたら何も残らない。「美しい」は俺の代名詞だ。

「あれ……？」

俺は一瞬、自分の目を疑つた。

群衆の中央に、長身の男が立つてゐる。ただ顔はよく見えない。野暮つたい黒髪が顔の半分以上を覆つてゐる。

そいつが身に纏つてゐるのは、艶やかな白色の生地で作られた婚礼のための豪華絢爛な正装だ。顔もよく見えない、むさ苦しい黒髪の男は俺のもとへと近づいてくる。

「ライオネル・バーノンと申します。ノア・フォーフィールド子爵令息。ようこそ我が城へおいでくださいました」

ライオネルは片膝を折り、右手を左の胸に当て、丁寧に俺に頭を下げた。これは最上級の敬意を表す挨拶の仕方だ。

それに驚いたのは俺だけじゃない。周りにいた城の使用人や兵士もざわついた。

ありえない。

ライオネルは公爵で辺境伯だ。子爵の息子の俺よりもライオネルのほうが圧倒的に身分が高い。それなのに、ここまでするなんて。

そもそも、ライオネル本人が直々に俺を出迎えに来ることすらありえない。

すごい歓迎ぶりだ。そんなに俺が大事なのか……？

「この城の当主で、辺境伯。そのあたりまではご存知でしょう」

立ち上がったライオネルは見上げるほど背が高かつた。俺より頭ひとつ分は大きい。婚礼のため

の白のウェストコートにシャツ、燕尾^{えんび}の真っ白な上着に身を包んでいるが、アルファ然とした体格のよさは見て取れる。

ただ顔がめちゃくちゃ怖い。

長くてモッサリした黒髪の間から見える鋭いギラギラした眼光が俺に向けられる。その深淵のような瞳は、まるで怪物みたいだ。顔は戦いの傷だらけで、特に目立つのは頬にある大きな十字の傷痕が生々しくて思わず目を背けたくなる。

そんな怖い顔の男が、俺を見下している。なまじ背が高いせいで、威圧感がやばい。

こいつは、いつといつからこんな醜悪な見た目で生きているんだろう。

十年の間にライオネルに何があった……？

ダメだ。うろたえるな。俺は今からこいつをこの美貌で魅了し、手玉に取つてやらなければ。までは俺を信用させて、徐々に財産と爵位を奪つてやる。

「初めまして、ノア・フォーフィールドです。お会いできて至極光栄に存じます」

俺は本心を隠して、得意の社交的な笑顔を見せる。鏡の前で何度も練習して作り上げた、完璧な笑みだ。

「初めてではありませんよ」

「えつ……」

思いがけない言葉をかけられ、一瞬、俺の表情が崩れた。だがすぐに平静を取り戻し、「そうでしたか」と笑顔で切り返す。

動搖するな。相手のペースに呑まれるな。

たしかにライオネルの言つてることは正しい。

実は、俺たちは今が初対面ではない。でも昔のことなんてライオネルはすっかり忘れているだろうと思つていた。

もし覚えていたら、ライオネルが俺に求婚してくるはずがない。

「はい。中央の城で何度もお姿を拝見しております。ずっと前から美しい方だと思つておりました」なんだ、と俺は拍子抜けする。

どうやらライオネルは昔のことを覚えていたわけじゃないようだ。

「こうして近くで見るとさらに美しい」

ライオネルは重い前髪の隙間から目を光らせ、俺を舐め回すように見る。

うわ怖え。何度もお姿を拝見とか、どれだけ俺のこと追いかけてたんだよ。俺には自分がライオネルに見られていたという意識はまったくない。

たしかに俺の容姿は目を引くだろうが、俺に話しかけもせず、陰から密かに見ていたとしたら、かなりキモい。見た目もそうだけど、そういう根暗なところがモテない要因のひとつなんじやないか。

「数々の求婚を断り、俺のもとに嫁いで来てくれたこと、とても嬉しく思っています」

ライオネルはニヤリと口角を上げ微笑む。

いや、笑うならもつとはつきりと笑えよ。笑顔は社交の初期スキルだろ。そのちょっと口角上げただけの顔は怖いし、嬉しさは微塵も伝わってこない。

これは絶対にモテない。二十九年間、辺境伯ともあろう御方に嫁が来ないはずだ。なるほどと納得した。

「結婚するならバーノン辺境伯さましかいないと思つておりました」

俺は上目遣いでしとやかに微笑む。

俺のこの言葉は嘘じやない。だって強大な権力となる司教の子孫の爵位を持っているのは、ライオネル・バーノン辺境伯ただひとりだ。

俺の政略結婚の相手は、こいつしかありえない。俺が選ぶのはいつだつてライオネルだけだ。
「そんな嬉しいことを言ってくれるのか」

ライオネルが俺に微笑みかけてきたとき、強い風が吹いた。野暮つたい黒い前髪が風に煽られ、顔が露わになる。

思わず俺は目を奪われた。

ライオネルの顔は傷だらけだ。でも、それを除けばかなりの男前だつた。澄んだ大きな目も、筋の通つた鼻梁も、唇の形だつて悪くない。

鍛え抜かれた逞しい身体も、凜々しい顔も、実はものすごく俺の好みというか、ここまでレベルの高いアルファは王都にもほとんどいないというか。

何を考えてる、俺！

ライオネルなんかにときめいちやダメだ。こいつはただの金づるで、俺はライオネルを騙しに来たんだから。

「一生、大切にする」

ライオネルは強風にびくともせずに、俺だけをまっすぐに見つめている。

そんなライオネルの真摯な態度に、俺の胸は痛みを覚える。

そのセリフを俺に言うのか。俺は一年後にはお前を捨てていなくなる最低の嫁だぞ。一生、一緒になんかない。

俺はお前を大切にしない。たとえライオネルが俺を大切にしてくとも、恩を仇で返す。

きっと一年後、何もかもを奪われたライオネルはこの言葉を後悔することになるだろう。俺のことを「クソみたいな嫁だつた」って怒つて、嫌いになるに決まっている。俺の顔も見たくなつて、会つてもくれなくなる。

いいんだ。それでいい。

性格の悪い俺はどうせ誰からも愛されない。いい人ぶつた化けの皮だつてすぐに剥がれる。本当の俺を知つたら、どのみちライオネルも離れていくんだから。

ライオネルとの明るい未来なんてこれっぽっちもない。

「俺の生涯をかけて、あなたを幸せにすると誓う。本当に、本当に俺と結婚してくれてありがとう。心から歓迎する」

ライオネルは大真面目に、俺に気持ちをぶつけてくる。

ほんとバカな奴。

俺を幸せにしてどうすんだよ。俺が幸せになつた分、お前は不幸になるのに。

心から歓迎しちゃダメだろ。一刻も早く俺を追い出さなくちゃ。

「ノアは本当に美しい」

ライオネルは俺を眺めて感嘆の溜め息をついた。こいつ、悪魔のような俺の正体にまるで気がついていない。

ライオネルは実は面食いだつたんだな。顔以外に俺が人に好かれる要素はひとつもないし。やつぱり俺の容姿は武器になる。ライオネルは王都に来たときに、たまたま俺を見かけてこの容姿に惚れたのだろう。遠くから見てているだけなら、俺の人柄まではわからないからな。俺は心中でほくそ笑む。

それなら好都合。案外早くカタがつくかもしれない。

「ありがとうございます。バーノン辺境伯」

俺はいつもどおりの完璧な笑顔を見せる。アルファから可愛いと評判の、とつておきの笑顔だ。こうでもしなきや、俺は平静でいられない。

自分を偽れ。ライオネルを騙せ。本心を見せたらそこでゲームは終わりだ。

ライオネルの言葉なんかに惑わされるものか。何をされても絶対に好きにならない。

『一生、大切にする』

全部わかっているのに、脳裏からさつきの言葉が離れない。

そのセリフをなんで今さら言うんだよ。しかもこんなに軽々しくさ。俺の気持ちも知らないで。

本当に嫌だ。

ライオネルは簡単に俺の心をかき乱していく。
「呼び方はライオネルでいい」

「えつ？」

「今日、俺たちは結婚するんだ。それなのにバーノン辺境伯とは他人行儀だろう?」
「なんてガードの緩い男だ。俺とライオネルにはかなりの身分差がある。そう簡単に呼び捨てを許すなんてことは普通はしない。」

「そうですか。では敬愛の意味を込めて、ライオネルと呼ばせていただきます」
「ああ。敬語も要らない。ノアと対等な関係になりたい。どうだろうか?」

「へえ。いいんだ。まあ、そのほうが俺にとつても好都合だ。」

「ありがとう。じゃあそうさせてもらうよ」

俺は早速、馴れ馴れしく話す。ライオネルはそれでいいというように頷いた。

ライオネルはさつきから自分で墓穴を掘つてばかりだ。俺に好意を示して、対等でいることを許して、それは全部、俺に有利に働くのに。

「あの、すみません。ライオネルさまはこの国の創始者であるバーノン司教の子孫であらせられます。いくらご結婚なさるとはいえ、そこまで許されではライオネルさまの権威が保たれません。それに他との均衡まんじゅうというものがございます。身分制度とは秩序を守るためのもの。どうかお考え直し

ください」

ライオネルの後ろに控えていた茶色い髪の男が唐突に口をはさんできた。こいつはどんな奴かと、すかさず俺の観察眼が働く。

見れば凛々しい顔をした青年で、騎士団の紋章を正装の胸の位置に着けていることから騎士だとわかる。しかも、あの紋章は騎士団長クラスの者に与えられる印だ。若いのに騎士団長とはかなり優秀な男なんだろう。

そしてこの騎士に対するライオネルの態度だ。急に口出ししてきたのに、静かに意見に耳を傾げている。おそらくこの騎士はライオネルの信頼を勝ち得ていると見た。

「エルドリック、あまり気にするな。この程度のことで秩序は壊れない」

ライオネルが茶髪の騎士、エルドリックを制する。

「ですが、ライオネルさま……っ！」

慌てるエルドリックに対し、ライオネルは至極冷静だ。

「誰にでも許すわけではない。俺にとつてノアが特別なだけだ」

エルドリックと話しているはずなのに、ライオネルは俺に熱い視線をぶつけてくる。

何? なんでそんなに俺が特別なんだよ。

なんだよライオネルは。ほんとにこいつといふと調子狂うな。

主人の頑なな態度を見て、エルドリックは仕方なしとでも言いたげな溜め息をついた。

「ライオネルさま。甘すぎます。やつとお相手が見つかってそこまでなさらなくとも……」

エルドリックの愚痴ぐちを聞いて、俺はピンときた。

ライオネルとしては、創始者である司教の血族を絶やすことはできない。

なんとしても結婚して自らの世継ぎが欲しかった。それなのに、見た目が恐ろしくて全然嫁が来ない。だから今回の俺との結婚は願つてもないものなのだろう。

なるほどな。別にライオネルは俺が好きなわけじゃない。嫁に来てくれるオメガだつたら誰でも歓迎したんだろう。

「ライオネル、やつぱりダメかな？」

「いいや、ノア。このように親しげに話ができるのは、とても嬉しい」

ライオネルはぎこちなく微笑んだ。獲物を見つけた怪物みたいに恐ろしい顔をしている。

またこの笑い方だ。だからさつきからそれ、怖いつて。

「行こう、ノア。今日は俺とお前の記念すべき日だ」

ライオネルは上機嫌で俺を城の中へと招き入れる。

本当に可哀想な男だ。今から結婚する相手は、お前が望んでいるような嫁じやない。見た目は麗しい人間だが、中身はそうではない。

俺こそ、本当の怪物モスクワだよ。

今日はこれから教会で婚礼式を挙げる。明日は大勢の人を集めて婚礼パーティーをする予定だ。婚礼式まで時間があるからと、ライオネルは自ら城を案内してくれた。エルドリックが「私にお任せください」と言つたのを制してまで、案内役を買って出たのだ。

父上は長旅の疲れで「式まで休みたい」と早々に客間へ向かい、案内を受けたのは俺とセオドアのふたりだ。

「あそこに見えるのが兵士たちの訓練場と宿舎、こつちは負傷者のための治療室だ」

辺境伯の城は、俺の知る一般的な城とは仕様がまったく異なっていた。もともとは優雅な城だつたのかもしれないが、今では城内は軍事に特化しており、砦と見紛うほどだ。貴族たちが好む贅沢ぜいたくな調度品はほとんどない。

こここの城の者たちは日々戦いに明け暮れ、中央にいる貴族みたいにのんびりお茶会なんてしないんだろうな。

「なんでこんな城の一番いいところに治療室があるんだ？」

治療室は、城門を抜けてすぐの中庭に面した城の一等地にあつた。普通、ここは来賓らいひんを迎える部屋に使われる場所で、治療室は城の地下にあることが多い。

「ここなら城へ帰還したあとすぐに怪我人を運び込める。それに、治療のときも、明るい場所のほうが気が休まるだろう？ 命を懸けて戦つてくれる兵士たちへの俺なりの敬意だ」

「へえ……」

なるほど、と俺は思った。

さつきから感じていることだが、ライオネルは城の人々に妙に人気がある。

ライオネルは、この辺境の地グルグガンドの民を第一に考えていく様子だ。城で働く使用人たち

や、兵士の待遇はかなり良いようで、だからみんなに慕われているんだろう。

ライオネルが治癒室を覗くと、みんな好意的な眼差しで、「こんにちは！」と挨拶してくる。

「辺境伯さまっ」

治癒係のひとりがにこやかに声をかける。若くて眞面目そうな女性だ。

「素敵なお召しものですね。すごくかっこいいです」

「ありがとう」

婚礼服を褒められ、ライオネルは素直に応じた。

「薬は足りていますよ。今日は誰かを見舞いにいらしたのですか？」

「いいや、今日は城の案内役を務めているのだ。こちらはフォーフィールド子爵令息。これから、お、俺の伴侶となる人だ」

ライオネルは照れている様子だが、もつさい前髪のせいでの表情はよくわからない。だがそのライオネルの言葉を聞きつけて、周囲の視線が一気に俺に集中した。

「ノア・フォーフィールドです」

俺は得意のよそいきの笑顔で挨拶する。すると周囲からどよめきが起った。美しいとか、そんな言葉が聞こえてくる。

まあ、この城の主であるライオネルの伴侶がどんな奴か気になつて仕方がなかつたんだろうな。

「すごく綺麗な御方ですね。さすが辺境伯さまです」

治癒係の女は「お似合いで」と言いながらも、どこか寂しげだ。その様子を見て俺はすぐに気

がついた。

「ああ。この女、ライオネルに片想いしてるな。

大丈夫だよ、一年で別れるから。とは言つてやれないで、俺は心の中でだけ『元氣出せ』と呴いてみる。一年後、俺に捨てられたライオネルを慰めてやれ。もしかしたらうまくいくかもしれないぞ。

「ありがとう」

皆からの祝福の声に、ライオネルはいちいち応えている。どうやら目の前にいる治癒係の子からの好意にはまつたく気がついていない様子だ。ま、恋愛に疎うだもんな、ライオネルは。

「ライオネルさまは、案外おモテになりますね」

そばに控えていたセオドアが俺の耳元で囁く。それを俺は「まさか」と邪険に追い払つた。そうなんだ。

この治癒係の女だけじゃない。はた端から見ていて、ライオネルに好意を抱いているような目をいくつも感じるんだ。

ライオネルが結婚するつて聞いて、耐えきれずに泣いている人もいた。王都での噂話と違う。ライオネルは辺境の民にとても慕われている。

なんかつまんないな。

こいつ、ダサ男のくせに普通にモテるんだ。俺なんかに執着しなくとも他に相手がいたんじゃないの、これ。

なんで俺？ 結婚相手は貴族がよかつたのかな。ライオネルはそういうことにこだわるタイプには見えないんだけどな。

そのとき、急にドンッと大きな音がした。何が起きたのかと皆が一斉にそちらを見る。

松葉杖をついた男がベッドから立ち上がりろうとして、倒れたのだ。手足に包帯を巻いている男は無様に床に倒れ、松葉杖が散らばっていた。

「ルカ！」

ライオネルが倒れた男のもとへ走った。俺もついていく。

「大丈夫かっ？」

近くにいた治癒係の男が駆け寄るが、ルカは差し伸べられた手を「触るな！」と振り払った。

なんだあの男。人がせつかく親切で手伝おうしてくれてんだから、拒絕すんなよ。

「クソッ、なんでこんなことに……！」

ルカは何かに憤慨^{ふんがい}している。自由の利かない身にイライラしているのだろうか。

ルカは俺と同い年くらいに見える。右手と右足には包帯が巻かれている、左の手首には色とりどりの糸で編んである出来の悪いブレスレットが三つ。指輪はしていないが、左手の指は黒い染料で汚れている。

俺は足元に落ちていた紙を拾う。そのときベッドのそばにクシャクシャに丸めた紙があることに気がついた。ルカは誰かに手紙を書こうとしていたようだ。

「ルカ。不自由かもしれないが、モンスターに噛まれた足はひと月休めば元どおりに動けるようにな

る。だから今はゆっくり休んでくれ」

ライオネルはルカのそばにしゃがみ込み、優しい言葉をかけている。

こんなふうに兵士ひとりひとりの名前や怪我の状態まで把握しているのだろうか。すごいな、ライオネルは。

「辺境伯さま……」

さすがに城主のことは邪険にできないようで、ルカはライオネルの手を借りて起き上がった。慰めるのもいいけどさ。それじゃなんの解決にもならないよな。

俺はおもむろにルカに近づいていく。

「これ、何？ 字が下手すぎて読めないんだけど」

さつき拾つた紙を目の前に突きつける。ルカは顔色を変えて、バッと紙を奪い取つた。

「利き手が使えなかつたんだな。弟のマールは今日が誕生日か？」

見透かしたように俺が言うと、ルカが驚き、目を見開いた。俺は言葉を続ける。

「手紙はマールという者に宛てたもの。文字は大きく内容は単純、つまり幼い子どもに向けて書いた。文字は途中だつたが、おそらく誕生日って書きたかったんだろう？」

たゞたゞしい文字だつたけれど、単語の端々なら読めた。それから推察するに、ルカにはマール

という名の弟がいて、もうすぐ誕生日なのではないだろうか。

「……マールの誕生日は明日です」

ルカは重苦しそうに口を開いた。

「去年も何もしてやれなかつた。約束してたんです、今年こそはちゃんと祝つてやるつて。なのに
今も約束を破つてしまつた……」

ルカはうつむいた。

「四人兄弟？ その糸で編んだブレスレットは、弟たちからの願掛けの贈り物？」

その問いかけに、ルカは信じられないというような顔つきで俺を見る。

「よくわかりましたね！」 そうです。弟が三人いるんです」

聞けばルカは男ばかりの四人兄弟の長男だった。俺と一緒に境遇だ。

「俺にも弟が三人いるんだ。ちなみに俺の一番下の弟の名前もマールだ」

俺も弟たちから願掛けのブレスレットをもらつたことがある。とても下手くそで、身に着けたらさすがに俺の品位が損なわれるっていう代物だつたから、大事に懐にしまわせてもらつたけど。

「家は？ どこにある？」

ルカは俺に場所を教えてくれた。ライオネルに聞いたらこの城の近くのようだ。

「今からルカの弟たちに招待状を出そう。明日の婚礼パーティーに間に合うように」

ルカが動けないなら弟を呼べばいい。

当然のことだが、城は自由な出入りを許しておらず、門番がいて許可のない者は追い返す。でも明日は婚礼パーティーの招待状がある者は中に入ることを許されている。だつたら俺が招待すればいい。

もちろん、貴族のパーティーには貴族しか呼ばないことは知つてている。

でもそんなのおかしいだろ。だから俺が常識を知らない、とぼけた奴つてことにすればいい。
「俺がいひつて言つたらいいよね、お願ひライオネル」

俺は猫なで声でライオネルに訴える。可愛いオメガのふりをするのには慣れている。

これでライオネルを試してやるんだ。俺の言うことをどこまで聞いてくれるかどうか。

ライオネルは俺の発言を聞いて急に笑い出した。

「何？ おかしい？」

「いいや。何もおかしくない。ノアの言うとおりだ。わかつた。今すぐルカの弟たちに招待状を書き、馬車を出して迎えに行かせよう」

ライオネルは近くにいた従者にすぐに手配をするよう伝えた。従者は「本気ですか」と言いながらもライオネルの指示に従う。

これにはルカまでも「そんなことしてよろしいんですか？」と言つてきた。

「俺の婚約パーティーなんだから俺が招待客を決めて何が悪いの？」

俺は純朴そうなオメガの顔をしてみせる。こういうときは何も知らないバカのふりをするのが一番だ。

「ノア。お前は何も悪くない。間違つてるのは慣例のほうだ。ルカ、よかつたな」

ライオネルは「ノアがこの城で暮らすことになつたら、楽くなりそうだ」と、やけに嬉しそうだ。さつきは憤つていたルカまでライオネルと意気投合して笑顔を見せていた。

「婚礼式があるからそろそろ失礼する。行こう、ノア」

どこか機嫌がよさそうに、ライオネルは治療室をあとにする。治療室を出てすぐ、俺は「なんだよさつきはあんなにニヤニヤして！」とライオネルを問い詰めた。

「ノア。俺は辺境伯で、公爵で、他にも爵位があつて、教会の総理事も務めている」

「あつそ、自慢？」

俺はちょっとイライラしながら返す。

「違う。それだけしがらみが多いということだ。自分の婚礼パーティーの招待客すら『最適』を見つけてそのとおりにするしかない。今回のパーティーに呼んだのは爵位や役職のある者だけだ。それも全員ではない」

「へえ……」

「そうだよな。そのくらいのこと俺も知ってる。でも偉い人しか呼ばないなんてつまらないだろ。貴族たちも、これはライオネルの意向ではなく世間知らずの嫁の我儘わがままでだと思えば納得するだろう。それに今回の件でよくわかった。ライオネルはバカみたいに俺の言いなりだ。

「ノアは観察眼に優れているな。あれだけの情報でルカの気持ちを推し量つてやることができたのだから」

「まあね」

人の機嫌を取るのは得意じゃないけど、人となりを見抜くのは得意だ。持っているもの、仕草、あらゆるところにそいつの特徴が出ると俺は思っている。

「ノアがいてくれて本当によかつた。自分の婚礼パーティーなのだから、本来なら好きなようにす

るべきだ」

「ありがと、ライオネル」

俺はあざとい笑顔を振りまく。この顔が可愛いはずだ。

案の定、ライオネルは俺のあざと可愛さにやられて照れている。

ホント容姿は大切。ちょっとにつこりすればいいのだから、アルフアはチョロすぎて扱いが楽だな。

「ノアは自由だな」

「なんだよ嫌味かつ？」

「違う。ノアがいてくれたら、俺のやりたいことをみんな叶えてくれそういう意味だ」

「んん……？」

俺は怪訝けげんな顔になる。

なんだよそれ、俺はお前を助ける気は微塵みじんもないけどな。

「ノアは本当に可愛い」

ライオネルが俺の頭に触れようとしてきた。

「おいこらっ」

俺は咄嗟とつさに避ける。頭ポンポンとか、子ども扱いされているみたいで嫌だ。俺はもうあのころと同じ子どもじやないし。

俺が避けたらライオネルはそれ以上は触れようとしてこなかつた。

「ノアの心は、あの澄み切った青空みたいだ」

「は……？」

ライオネルの詩的な表現は俺にはまったく伝わらない。ただ、案内されたその先には、たしかに見惚れるほどの広大な新緑の芝生と青空が広がっていた。

ここは城の中庭を抜けた先にある、芝生の広場だ。

気持ちのいい風が吹き、ざわざわと草が揺れ、青空に鳥が悠々と羽ばたいていた。

ライオネルは見誤っている。俺の心は間違つてもこんな爽やかな青空じやない。

広場の先には木製の小屋がある。大きな厩舎ヨウサみたいな形の小屋だ。

「辺境伯さま、あれはドラゴン小屋ですか？」

セオドアが遠くの小屋を指しながら、ライオネルにキラキラした純粹な目を向ける。

セオドアは大のドラゴン好きだ。まあ、男なら誰でも一度はドラゴンに憧れる。そのくらいドラ

ゴンは特別な生き物だ。

「ああ、そうだ。この地にある森の奥は、ドラゴンの谷と呼ばれるほどドラゴンが多く生息しているらしい。そのため昔はグルグガンドの竜騎士団は国内で最大の規模を誇っていたんだ」

「ええ。ここはドラゴンが多い地域なんだ。

「だが今は一頭もいない。俺が赴任して十年、竜騎士は誕生していない」

風に吹かれつつ、ライオネルは寂しげな表情をする。

今も昔も竜騎士は最強部隊だ。だって地上を駆けることしかできない騎馬部隊よりも、空を自由に飛び、炎を吐くことができるドラゴン部隊のほうが強いに決まっている。機動力、攻撃力ともに

圧倒的だ。この地は日々戦いに明け暮れているから、戦力アップのためににもぜひとも竜騎士部隊を編成したいところだろう。

「そうですね。ドラゴンは滅多に人に懐きませんものね……」

セオドアの言うとおりだ。ドラゴンに出会うだけでも珍しいことなのに、さらに人に懐くドラゴンなんて本当に稀だ。最強竜騎士団を有する王都でも、竜騎士の数は指で数えられる程度しかいない。「竜騎士部隊を作りたいと思つてはいるのだがな。夢に終わるだろう」

うつむくライオネルに、気軽に「大丈夫、いつかは叶うつて！」などとは言えない。さすがに無理だと思う。可哀想だけど。

「セオドア、と言つたな。その黄色い瞳……お前は西の国ラクナの出身なのか？」

「はい。そうです、移民です」

「ラクナの移民を雇つているのか」

ライオネルは俺に何か言いたげな視線を向けてくる。

「は？ 違うし。セオドアを雇つたのは父上だ」

雇つているのは間違つても俺じゃない。俺がこんな奴を望んでそばに置いたりするわけないだろ。

「ノアは優しいな」

「だから、俺じゃない」

「ノア、素直になれよ。こうして従者として近くにいることを許しているのはノア自身だ」「違うって！」

俺じやないつて言つてるのに、ライオネルは俺を愛おしげな目で見つめてくる。

おかしいだろ、その熱い視線！ お人好しなのは父上だつて！

俺をそういう目で見るな。……決心が鈍るから。

「そうだノア。お前にずっと言いたいことがあつたんだ」

ライオネルは微笑む。傷だらけのその顔は意外にもかっこよくて、俺としたことがライオネルから視線を逸させない。

「俺と結婚してくれ。ノア」

ライオネルは両手で俺の手を取り、胸の前で包み込むように握りしめる。

「はあつ？」

なんで急にこの展開つ？ なぜ愛おしそうに俺の手を握る？ ダメだつて、そういう本気っぽい眼差しは！

これは政略結婚だ。そこに気持ちなんてない。むしろあつてはいけない。ライオネルだつて俺を遠くから見てただけで見た目に惹かれて求婚してるんだ。そんなの、本当の愛じゃない。

そう頭ではわかっているのに、俺は心臓のドキドキが収まらない。

落ち着け俺。うまくやれ、うまくやれ。

「よろこんでお受けいたします」

俺が得意の可愛い顔で微笑むと、ライオネルは静かに頷いた。

タイミングよく、リングーンと教会の鐘が鳴る。まるで俺たちの結婚を祝福するようにな。

いやなんのギヤグだよこれ。俺はまつたく乗り気じやないけれども！

「俺たちの意志は同じ。では決まりだな。教会はあちらだ」

ライオネルは石畳の小道を歩き出した。その先には白亜の教会がある。

プロポーズして数分後には教会で式を挙げんのかよ。なんかすごい性急な展開だな。まあ、俺たちは最初から政略結婚することが決まつていたけど。

天高くそびえ立つ塔が三つ。中央は一番高く、アーチ型の天井が芸術的だ。なかなかに立派な教会だと思う。さすがバーノン司教の子孫、教会に重きを置いているのかもしれない。

澄み渡るような青い空、真っ白な教会に、その前には新緑の芝生が広がっている。俺には似つかわしくない、爽やかで美しい景色だ。

教会には参列者が集まっている。俺とライオネルの婚礼式を見守るための人たち。一年後には離婚するとは知らずに、俺たちを笑顔で祝福するんだろうか。

「今日は最良の日だ」

眩しそうに青い大空を見上げながら、ライオネルが呟く。

その無垢な表情は、昔と何も変わらない。なぜだろう。俺は見たこともないくせに、ドラゴンの背に乗り大空を駆ける竜騎士ライオネルの姿を頭に思い描いた。

それから俺たちは教会で、晴れて結婚の契りを交わした。婚礼式はバーノン司教一族の形式で行われたんだけど、それは王都での一般的な式とは少し違つた。指輪の交換も誓いのキスもなし。用

意された宣誓書に各々サインをするだけ。

変わっているのは祈りの時間があることだ。教会で厳かに祈りを捧げる。そうすると司教からのお告げの言葉がいただけるという仕様になつてている。

その司教の言葉は、もちろんバーノン司教からのありがたい言葉つて扱いなんだけど、きっと事前に考えてあつたものに違いない。俺はそういう先祖の魂的なものは信じていない。

「我が子孫、ライオネル。汝は片時も伴侶から離れるな。さすれば背負った宿命を打ち払うことができよう」

ライオネルは眞面目な顔で「はい」と司教に返事して、隣で聞いている俺はたまつたものじやない。

やだよ、ライオネルが四六時中俺のそばにいるなんて。司教の野郎、適当なこと言いやがつて、それをライオネルが信じちゃつたらどうなる？ はつきり言つて迷惑なんだよ。

「ノア・フォーフィールド」

いきなり名前を呼ばれて、俺はハツと顔を上げた。

俺にも御言葉があるんだ。別に俺は子孫じゃないのに。

「偽りの姿を捨て、心の赴くままにせよ。このままでは道を誤る。後悔しないように眞実の姿を知れ」

司教の言葉に俺は内心焦る。
こんな言葉はただの偶然で、誰だつて大なり小なり偽りの姿を持つて生きている。そう思うのに、胸の内を見透かされた気がした。

そう。俺は自分を偽つている。

「お前には道しるべがある。己の伴侶が眞実の姿を映す鏡となろう」

俺の伴侶って、ライオネルのことか？

ライオネルが俺を映す鏡？ 比喩^{ひゆ}が過ぎて意味がよくわからない。

「御言葉は、以上です」

司教は静かに両手のひらを合わせたあと、「おふたりの結婚をバーノン司教は祝福されています」

と嘘か本当かわからぬよう、綺麗な言葉で締めた。

俺は斜に構えた態度で聞いていたけど、俺の隣にいるライオネルは「司教からありがたい言葉をいただいた」といたく感動していた。本当に純粹な男だな、ライオネルは。

そんな純粹男の横顔を眺めていたら、ライオネルが振り向いた。

「ノア、できるだけ一緒にいよう」

ライオネルが下手くそな笑顔で俺に微笑みかけてくる。

……は？ さつきの司教の言葉をさつそく真に受けたのか、こいつは。

つたく、なんだよ単純だなと思しながらも、そんな気持ちは綺麗さっぱり隠して、俺はライオネルに美しく微笑んでみせる。

「宿命を打ち払う力、眞実を映す鏡、俺たちはお互いを助け合う、運命の番みたいですからね」嫌味を込めて運命の番^{つかい}という言葉を使ってやつたのに、ライオネルは「そうだな、俺たちは運命に導かれたんだな」と軽々しく頷いた。

俺たちは運命じやないだろ。これは愛情のない、ただの政略結婚だ。

その辺、ライオネルはわかつてゐるのかな。これは恋愛結婚なんかじやないんだよ。

「ノア」

名前を呼ばれて俺はライオネルを見上げる。

俺の目の前にいるのは野暮やまつた黒髪の男だ。数多くの死戦をくぐり抜けたであろう傷だらけの痛々しい顔をしてるくせに、ライオネルは優しい眼差しを向けてくる。

どうしてこんなに傷ついてるのに、人に優しくできるのかな。俺にも、兵士たちにも、使用人たちにも、身分の隔へだたりなくライオネルは常に優しい。

「大丈夫だ。この結婚、決して後悔はさせない。ノアを幸せにしてみせるよ」

ライオネルは俺に手を伸ばしてきた。

その手を取る必要はない。いくらでも理由をつけて振り払うことができる。

それなのに不思議だ。

そこに理屈みたいなものなどなく、気がついたら俺はライオネルの手に自らの手を重ねていた。きっと人の視線があつたせいだろう。俺がライオネルを受け入れたわけじゃない。

そうだ。そうに決まっている。

ライオネルとの婚礼式はつつがなく終わり、俺は今日からこの城でライオネルと暮らすこととなる。

そして今、俺はめちゃくちゃ驚いている。

城の中にある、夫夫ふうふが暮らす新居の部屋を俺が来る前に改築したそうで、何もかもが新品なのだ。

「うわあ！　すごいな……！」

見回せば、統一感のある家具や調度品の数々が眩しい。

居間のソファーや、寝室のベッドも最高級のものをわざわざ取り寄せたそつだ。

俺の実家は、人のいい父上のせいであつたく金がなかつた。没落寸前の田舎子爵いなかの屋敷なんてとかが知れている。ここ辺境伯の城とは比べものにならない貧相な住居だった。

それが、今日から俺が過ごすのはこの新居だ。こんな綺麗な部屋で生活できるなんて、テンションが上がる。これは予想外だ。

「ノアがここで暮らすことになるから、全部直したんだ。これからはふたりになるのだから、俺がひとりで使つていたころとは勝手も違うしな」

「はは……すごすぎて言葉にならないよ」

ライオネルは、まさか一年間限定のふたり暮らしとは思つていないのだろう。書斎の椅子と机もふたり分並べてあるし、俺専用のワードローブには、俺のための服がズラリと並べてある。実家には金がなくて最低限の服しかなかったから、これはとても助かる。

そしてその横には、装飾の施された大きな姿見がある。鏡まで用意するとは、俺のことわかつてゐるな。ライオネルは案外、気が利く男なのかもしない。

「ノア」

ひとしきり部屋の案内をしてくれたライオネルが、最後に俺のほうを向き、おずおずと話しかけてきた。

「そ、その……気に入ってくれただろうか」

「ん？」

「ノアの父上のフォーフィールド子爵に、ノアはどんなものが好みなのか事前に聞いて用意したんだ。故郷を離れて俺のもとに来てくれるのだから、少しでも快適に暮らしてほしくて、ノ、ノア好みの部屋にしたつもりなのだが……」

嘘だろう。そこまで俺を迎える準備をしてたのかよ。

たしかに俺好みの部屋だ。用意された服のセンスもいいし、大きな鏡と机だけは譲れない俺のこだわりがちゃんと叶っている。

「もちろん。これからずっとライオネルとここで暮らせると思うと嬉しいよ」

俺はライオネルに微笑んでみせる。

一年後、爵位を奪つたら離婚することを悟られてはいけない。わざと未来があるような言い方をしてやつた。

「そうか。気に入つてもらえて安心した。俺の友人に、新居が嫌で離縁状を突きつけられた男がいて、その話を聞いて慌てて用意したんだ。ノアに逃げられてしまつては大変なことになるからな」「あ、そ、そう……」

新居を用意しても、お前の嫁は一年後にはここから逃げ出すけどな。

ただ気になるのは、ベッドはひとつだけってところだ。サイズは大きいが、部屋のどこを見てもやつぱり他にベッドはない。

これは何か対策を練つたほうがいいだろう。

「綺麗好きのノアは、毎日風呂に入ると聞いたから、湯浴みのための風呂もすぐ近くに作らせたんだ。今までは浴場に行くのが面倒で、俺はつい、おざなりになつてしまつていたが、今後は楽になるなん……？」おざなり……？

「えっと、風呂はあまり入らないタイプ？」

「ああ。どうせ戦場で汚れるんだから」

うわ、これだ。ライオネルに変な噂が立つた理由！

今日は婚礼式があつたから小綺麗にしたんだろう。でも、普段はやばかつたんじやないか。「ライオネル。これからは毎日湯浴みをしてほしい」

「毎日……？」

「そうだ。できるだけ身体を綺麗に保つんだ。お願い、できるかな？」

俺はあざとい上目遣いでおねだりする。その顔を見てライオネルは頬を紅潮させた。

やつぱり、こいつはチヨロい。

「やる。ノアの言うとおりにする。城にいるときは毎日湯浴みをすることにしよう」

ライオネルはあつさりと俺のお願いを受け入れた。

「それからその野暮やほつたい髪を整えてほしい」

「髪……？」

「これは戦場で敵に視線を悟られないようにしているものだが」

「へええ！ その野暮つたいたい髪形にちゃんと意味あつたのかよ！ ダサすぎるって！」

「でも俺はさみしいよ。ライオネルの目を見て話したいな。せつかく新婚なのに……」

俺は奥ゆかしく照れるそぶりをしてみせる。こういう控え目なオメガが、アルファにモテるとわかつているから。

「わかった。即刻やめる」

ライオネルはこれも受け入れた。なんだこいつ、ちょっと可愛い顔をすれば、簡単に俺の思うがままになるな。

「それと、顔の傷」

俺はライオネルの前髪に手を伸ばし、そつと搔き上げる。俺が髪に触れても嫌がりはしなかった。ライオネルの顔には無数の傷痕がある。戦いに明け暮れていたせいなのかも知れないが、生々しそぎて、せっかくの美形を台無しにしている。

そもそも辺境伯なんだから戦いで前線に立つなよ。士気を上げるためにとしても、戦場に敵の総大将がいたら狙われるに決まっているだろ。命が惜しくないのか、よほど腕に自信があるのか。

「これ、治さないの？」

俺はライオネルの顔を眺めながら訊ねる。さつきのモサい髪形には意味があつたから、戦場ではこれも意味があるとか言い出すんだろうか。

「……治せるものなのかな？」

「えつ？」

「傷は塞がるが、痕は消えない。俺は視野が狭くなるのが苦手で、戦いのときに鉄仮面は被らない。多少の傷は仕方がない」

ライオネルは本気で言っているみたいだ。

「^{ヒール}回復の魔法で治せるよ。……まさか知らないのか？」

「知らない。傷薬を塗つて、それだけだ」

「傷薬だけ？ 信じられない」

この世には魔法っていう便利な能力がある。誰でも使えるわけではないし、魔力の強さに個人差はあるが、割と一般的だ。俺だって使える。

「俺は魔法とは無縁だからな」

ライオネルにはどうやら魔力はないらしい。まあ魔法が使える人はそう多くはないから、羨ましがられる能力はある。

魔法には大きく分けてふたつの種類がある。

まず、俺が使っているのは近代魔法だ。大地や水、降り注ぐ太陽の力などを集めてエネルギーに交換して使用する魔法で、つまり術者からは何も失われない。外からのエネルギーを自らの身体を媒体として集中し増大させることで魔法を使うことができる。まあ、自分が媒体となるからそれなりに疲れるけど、それは休息をとれば回復するものだ。

もうひとつは古代魔法。こちらは人間では扱えない力を持つ者と契約を交わして、その力を授け

てもらうというものだ。戦いばかりだった古の時代は、その強大な魔力を求めて古代魔法の使い手が多くいた。ただし契約を交わすためには術者は大きな代償を払わなければならない。視力や片腕を取られたり、ひどいと呪いをかけられ寿命を奪われたりする。契約相手は人間ではなく、悪魔だからだ。

悪魔魔法は強すぎる。そのため今はそのほとんどが禁忌魔法とされている。

今は古代魔法の使い手なんて滅多に見かけない。強い魔法は法で規制されていて使えないし、そもそも誰だつて代償を払いたくないよな。

「魔法が使えなくても、この城に魔術師くらいいるだろ……」

「たたく。誰かライオネルに教えてやればいいのに。」

「このままでいい。どうせこの身などどうでもよいのだ」

ライオネルはそれで話を終わらせようとする。

「おいおい、ダメだろ。この俺が治るつて言つてんだから。

「ライオネル、お願いがあるんだけどさ」

俺は何度目かすっかりわからなくなつたライオネルへのお願いをする。

「なんだ？」

「俺のために、治してくれないかな。ライオネルにはかつこよくいてほしい。俺のためにかつこよくなつて」

俺が得意の可愛いオメガ顔をライオネルに向けると、ライオネルはわかりやすく頬を赤らめ照

れる。

やつぱり顔だな。顔がいいのは最大の武器だ。

「ノアのためか。……不思議だ。そう考えるだけで、俺自身を大切にしたいと思える。俺はもう独り身ではなくなつたんだな……」

なんかライオネル、しみじみしちゃつてるけど大丈夫かな。

「治せるものなら治したい。傷の痛みのせいでの表情がうまく作れないんだ」

あ、それでライオネルはあんな変な笑い方してたのか。目もほとんど見えないし、傷だらけの顔でニヤリと笑われたら怖すぎるんだよ。

「今、治そうか？」

微笑みかけると、ライオネルは素直に頷いた。

俺は意識を集中させる。

こう見えて、俺の魔力は高いほうだ。魔法学校への入学許可も出たが、自分の意思で入学はしなかつた。そのくらいの実力はある。

ライオネルの傷に手のひらをかざしてヒールの魔法を唱える。手のひらから熱が放たれ、光に包まれたライオネルの傷痕が消えていった。

久しぶりに魔法を使つたせいで、少しクラツとする。ライオネルの傷の数が多いから思ったより力を消費したのだろう。

「綺麗になつたよ」